



求める昔の友達

ビーイングキャッスル周辺 岸壁

とある天気の良い昼下がり。

ビーイングキャッスルのある島の岸壁付近に2人の影が。

「釣れないなー・・・」

「なあ。 本当に釣れんのか？ コレ。」

隣で呟くプレスルに向かって、ホープは持っていた釣竿を突つきながら言った。

「ってかさ、なんで急に釣りなんかしようと思ったんだ？」

ホープは釣竿を持ったまま、プレスルに問いかけた。

「趣味だよ趣味。 休憩の時はコレが一番。」

プレスルは楽しそうに返答した。

「・・・釣れた事、あるか？」

「偶にな。 滅多に来ないけど。」

「滅多に・・・ ちょっと心配だな。」

ホープは膝に肘を寄せ、ちょっと退屈そうにしつつ言った。

「ホープ、プレスル、釣れそう？」

そんな2人のいる場所に、ティザーがやってきた。

「あんまり期待出来ないな。 さっきから当たりが来ない。」

「同じく。」

プレスルの言った事に対して、ホープは口を並べるように言った。

「そう。一応ホネスティに買い物頼んだから、それを宛にしましょうか。」

2人が座っているイスに、ティザーは座りつつ言った。

「すまないな。」

「いいのよ。昔からそうだったんだし。」

プレスルの言った事に相槌を打ちつつ、ティザーはプレスルを見た。

「・・・何だ？」

「なんでもないわよ。フフッ」

プレスルの様子を見て、ティザーは苦笑しつつ言った。

「？ お前も昔から変わらないな。」

「そう？ コレでも少しはおしとやかになったつもりだったんだけど。」

ティザーは軽くポーズを取りつつ、プレスルに言った。

「まだおてんばが抜けてねえよ。ま、昔どおりが一番だけどな。」

「昔かぁ・・・」

プレスルが苦笑する中、ティザーは少し考え事をしていた。

『やっぱり仲が良いんだな。いつもの事ながら。』

そんな2人を、ホープは遠目で見つつ釣りに戻った。

「あの子、今何処にいるのかな・・・」

「そうだな・・・」

ティザーの言った事に対して、プレスルは記憶を辿りつつ言った。

「あの子って、誰だ？」

そんな2人のやり取りを聞き、ホープは口を挟んだ。

「あ．．．．」

質問を聞き、プレスルは顔色を暗くしつつティザーを見た。

「良いわよ、言って。 もう誰にも話す事なんて無いと思うから。」

「．．わかった。」

ティザーの返答を聞き、プレスルはホープの方へと向き直った。

「昔、俺達がココに働く前にな。 別の種族の友達が1人いたんだ。」

「確かあの子の種族は、シービショップって言ってたわね。」

プレスルが言った事に対して、ティザーは付け足すように言った。

「シービショップって、魚人か？」

「そうよ。 その子は綺麗な青い肌に赤いバンダナ。 尻尾に変わった模様の入ってる鮫の子なの。 私達より少し幼かったわ。」

ティザーは楽しそうにその友達の事を話した。

「でも、住んでた島に竜巻が来て、離れ離れになってしまった。 1人だけ出た、犠牲者になって．．．」

楽しそうに話していた2人は、急に顔色を暗くした。

「犠牲者って．．．」

「ああ、生贄って意味じゃないの。 竜巻に巻き込まれちゃったの、しがみ付いていた場所の木

が壊れちゃって・・・」

「・・・」

「不慮の事故よ。 その部分の木は少し傷んでたのを、私達忘れてたの。 巻き込まれない事が最優先だったから。」

ティザーはその時の心境を、詳しく説明した。

「で、その鮫とは・・・」

「ええ、それ以来ずっと会ってないの。」

ホープの質問に、ティザーは答えた。

「探せる範囲で、懸命に私達は探したわ。」

「でも、見つける事が出来なかったんだ。 アイツ、コンストラクトを。」

プレスルは悔しそうに言った。

「その後よ。 チェリー様の旦那様に会って、ココの住み込みの使用人として雇われたのは。」

「そんな事があったのか・・・」

ホープは2人の昔話を聞き、納得した。

「俺も一緒に探してもいいか？ 今の2人より、自由に動けるからさ。」

「え？」

ホープの言った事に、2人は驚いた。

「でも、ここら辺にいるって核心は無いわよ。」

「それでもいいだろ。 どの道城にいない時は、暇を持て余してるんだからさ。」

ティザーの言った事に、ホープは普段どおりふざけた感じに言った。

「わかった。 一緒に探してくれ。」

「プレスル。」

「どうせなら、見つかった方が俺らも嬉しいだろ？ 安否は確かめたいんだからさ。」

ティザーからの制止に、プレスルは利点を言った。

「・・・それもそうね。 わかったわ。」

「よし、交渉成立だな。」

ホープは持っていた釣竿を回収し、笑顔で言った。

「見た目や名前を、教えてもらえるか？」

ひとまず城へと戻った3人は、ホープの部屋で話を進めていた。

「あの子の名前は『コンストラクト・ザ・カラー』 シービショップという種族で、蒼い鮫よ。
」

「特徴的なのは、尻尾にヒトデの形をした模様が入ってることだ。 あの時と一緒になら、赤いバンダナもしているはずだ。」

プレスルとティザーから情報を仕入れ、ホープは身支度を済ませた。

「了解。 じゃあひとまずここらを見てくるぜ。」

「ああ、頼むぜ。 ホープ。」

「お気をつけて。」

自室の窓から飛び出し、プレスルとティザーはホープを見送った。

「さてと、俺らも仕事に戻るか。」

「そうね。」

少し明るい表情でプレスルが言うと、ティザーも笑顔でそれに答えた。

テトラクリスタルアイランド 北側エリア周辺 海

『うーん。 やっぱこの時期の水泳は最高ね☆ 気持ち良いわ〜』

テトラクリスタルアイランドの北側エリアの近くの海。

そこには防水加工が施されている族長の服を身に纏い、素足で海の中を泳ぎまわっているジョイの姿があった。

水中は透き通っており、綺麗な海には海藻や珊瑚が生え、とても綺麗な風景が広がっていた。

『皆も優雅に泳げば良いのに。 こんなに自由に泳ぎまわれるなんて最高だと思うんだけどなー』

特に行き先が無いものの、ジョイは自由に辺りの散策をしつつ泳ぎ回っていた。
すると

シュワッ！

『！？』

ジョイの目の前を何かが勢いよく通過し、視界が泡に包まれた。

『な、何？』

視界を覆う泡を払い、ジョイは目の前を泳いで行った影がいたと思われる方向を見た。
するとそこには、蒼色の肌に赤いバンダナをした鯨が一匹、泳いでいた。

「あ、ゴメンなさい！ 大丈夫ですか？」

ジョイの姿を見て、通過した鯨がその場を振り返り、こちらに泳ぎつつ言った。

「え、ええ。 大丈夫よ。 ちょっと驚いたけど・・・」

ジョイはそんな鯨の言葉を聞き、素直に答えた。

「ゴメンなさい、新しい島を見つけて急いで泳いでたもので。」

「新しい島？」

鮫の言った事に、ジョイは問いかけた。

「はい。 僕、ちょっと探している人達がいるんです。 ココの島の人ですか？」

「ええ、そうよ。 何だったら、アタシが島を案内しよっか？ そこまで広い島じゃないけど。」

ジョイはふと思いつき、鮫に提案を出した。

「本当ですか？ ありがとうございます。」

「いいのいいの、気にしないで。」

鮫は嬉しそうにそう言うと、ジョイは笑顔でそう言った。

「あ、名前聞いてもいい？」

ジョイはふと思い、名前を聞いた。

「コンストラト・ザ・コーラルといいます。 長かったら、ラクトと呼んで下さい。」

「ラクトね。 アタシはジョイ・スコール。 ヨロシクね。」

「よろしく、ジョイさん。」

ラクトと名乗る鮫に自己紹介をすると、2人は島に向かって泳いで行った。

テトラクリスタルアイランド 北側エリア

ラクトと名乗る鯨に出合ったジョイは、ひとまず陸へと上がった。

「そのまま出歩いてもいいけど、まず服乾かしたいの。 いい？」

「あ、はい。 いいですよ。」

ジョイはラクトに断ると、家へと招待した。

「じゃあちょっと服乾かしてくるから、待っててね。」

ラクトを一時リビングへ残し、ジョイは自室へと戻って行った。

1人になったらラクトはソファへと座り、ジョイの帰りを待った。

「お待たせラクト。 . . . あら？」

着替えを済ませたジョイがリビングへと戻ると、ソファの上に横になり寝ているラクトの姿があった。

「Z Z z z . . .」

『疲れてたのね . . . じゃあ島の案内は明日でもいいわね。 えっと、タオルタオルっと。』

寝ているラクトを起こさないようにジョイは歩き、近くにあったタオルケットをラクトに掛けた。

『 . . . それにしても不思議な子。 鯨なのね。』

ラクトの寝ているソファに近い、別のソファへとジョイは座り、ラクトをしばらく見ていた。すると、

コンコンッ

「? はい。」

家の扉をノックする音が聞こえ、ジョイは控えめに返事をし入り口へと向かった。

ガチャッ

「よ、ジョイ。」

「こんにちは。」

「遊びに来たぜ。」

扉を開けると、いつもの3人組が族長スタイルで立っていた。

「あら皆。 どうしたの？」

ジョイは外へと出つつ扉を閉め、3人に問いかけた。

「偶々遊びに来ただけさ。 また泉に集まってな。」

「で、ジョイの所へ行こうって事になったんだ。」

ストレンジャーとピスフリーはそう答えた。

「そうだったの。 でも今、ラクトが寝てるんだ。 賑やかには出来ないけど。」

「ラクト？」

アルドールはジョイの言った事を聞き、言った。

「ええ、海を泳いでたらラクトって鮫の子に会ってね。 島を案内する予定だったんだけど、寝ちゃって。」

「鮫? 珍しいな。」

「でしょ？」

相槌を打ったストレンジャーに対して、ジョイはそう言った。

「まあ静かにしてる分には構わないけど。 . . . ってか、いつも地下のカジノだから関係ないんじゃない？」

ピスフリーはふと思い、問いかけた。

「まあそうなんだけどね。起こさないようにね？」

「ええ、わかったわ。」

「お邪魔しまーす。」

ジョイが言った事にアルドールは言うと、3人は家へと入った。

「ZZzzz・・・」

「本当、鮫ね。」

「ああ。」

寝ているラクトのそばを通ると、アルドールとピスフリーはそう言った。

「多分今日の夜くらいに起きると思うから、明日島の案内をしてあげようと思ったんだ。」

ラクトがココへ来た理由を、ジョイは説明した。

「じゃあ俺らもするか？ 担当者の方が説明できるしな。」

「そうね。」

「別にそれでもいいわよ。」

「じゃあ決まりだな。」

ストレンジャーの意見に2人は同意し、ピスフリーはそう言った。

すると

「う、うーん・・・」

『あっ』

寝ていたラクトが目を覚まし、体を動かした。

「あ、ピスフリーが起こした。」

「人間きの悪い言い方すんな・・・」

「ふわあ・・・ 良く寝た。」

ジョイとピスフリーがやり取りをする中、ラクトは目を擦りながら体を起こした。

「おはよう、ラクトさん。」

「？ 皆さんは？」

アルドールが声を掛けると、ラクトは辺りを見渡しつつ問いかけた。

「ジョイの友達だ。 起こしちまって悪かったな。」

「あ、いえ。 自分が寝ちゃったのが悪いんです、すみませんでした。」

ストレンジャーがそう言うと、ラクトは謝った。

「ラクト、アタシとストレンジャー達が島を案内する事になったんだけど、今から行く？」

ソファから下り立ち上がったラクトに対して、ジョイは問いかけた。

「はい。 お願いしてもいいですか？」

「もちろん。」

ラクトはそう言うと、ピスフリーはそう言った。

「じゃあ行きましょうか。 ラクトさん。」

「はい、えっと・・・」

ラクトはアルドール達にお礼を言おうとしたが、言葉を詰まらせる様子を見せた。

「ああ、自己紹介がまだだったな。 俺はストレンジャー・ザ・ドラゴンだ。」

「私はアルドール・スパロウ。 アルドールと呼んで下さい。」

「俺はピスフリー・ザ・タイガーだ。 よろしくなラクト。」

ストレンジャーがそう言うと、次々に2人は自己紹介をした。

「ストレンジャーさんに、アルドールさんに、ピスフリーさんですね。 自分はコンストラクト・ザ・コーラルと言います。 よろしく。」

「ああ、よろしくな。」

ラクトは名前を確認し終わると名前を名乗り、お辞儀をした。

テトラクリスタルアイランド周辺 空

「うーん・・・ やっぱり動いてる方が気が楽だな。 釣りは俺には向かないな。」

テトラクリスタルアイランド周辺の空をラッパに座って飛びつつ、ホープはそう呟いた。

『えっと、目標は蒼い鮫だったな。 ここらじゃ珍しい種族に色だし、すぐに見つかるだろ。』

ラッパに座りつつ、ホープは島の住人達を見つつターゲットを探した。
だがいつもどおりの光景に種族達ばかりで、蒼い鮫は見当たらなかった。

『ま、すぐには見つからないか。 ・・お。』

ホープは一通り見ていると、北側エリアの大きな家から見覚えのある存在達の姿が。

『ストレンジャー達か。 言ってもいいが、まあそこまで大きな搜索じゃないから言わなくてもいい・・・ ！？』

家から出てくるストレンジャー達を眺めつつ考えていると、見覚えの無い上に気になる存在が。

『蒼い肌に赤いバンダナ、そして尻尾にヒトデの模様が・・・ あった。』

気になる存在の裏へと空から周り、ホープは尻尾にある模様を確認した。

『間違いないな、アイツがコンストラクトか。 ・・・でも、こんなに早く見つかるか？
普通。』

なんだか出来すぎてるような流れにホープは首を傾げつつ、ストレンジャー達の元へと向かって行った。

泉の庭園周辺 森

「そういえばラクト、誰か探してるって言ってたっけ？」

森を歩きつつ、ジョイはふと思い出したかのようにラクトへ問いかけた。

「あ、はい。 昔お世話になった2人を探してるんです。 僕が竜巻に巻き込まれて行方不明になっちゃって、心配してると思って。」

「竜巻に？ よく平気だったな。」

「飛ばされた先が海だったので、怪我は無かったです。」

ピスフリーの問いかけにラクトは答えつつジェスチャーをした。

「名前は、覚えてるか？」

ラクトのジェスチャーが終わるのを見計らい、ストレンジャーは問いかけた。

「えっと、『プレスル』さんっていうトカゲと、『ティザー』さんっていうトカゲです。 緑色の。」

「プレスルとティザー！？」

軽く聞いていた話に聞き覚えのある単語を聞き、ピスフリーとジョイは大声でほぼ同時に言った。

「あ、はい。 そうですけど・・・」

「まさかとは思うが、それって。」

「おーい、ストレンジャー」

ストレンジャーが話すのをさえぎり、空から名前を呼ぶ声がした。

「？ お、ホープ。 丁度良かった。」

「何がだ？」

ストレンジャー達の立つ場所の近くまで下降したホープを見つつ、ストレンジャーは言った。

「ラクトがプレスルとティザーを探してたんだ。」

「じゃあやっぱりお前がコンストラクトか？」

ストレンジャーの言った事で確信を持ったのか、ホープはそう言った。

「はい、そうですけど。 プレスルさんとティザーさんをご存知で？」

「ああ、俺のいる場所の使用人をやってる。 俺は2人に君の搜索願を聞いて探してたんだ。」

ホープはそう言うと、持っていたメモをラクトへ手渡した。

ラクトはそれを受け取り、メモに目を通した。

「今から会う事って、可能ですか？」

メモを読み終えたラクトはホープにそう言った。

「ああ、全然OKだ。 一緒に行こうぜ。」

「俺達も一緒に行くぜ、ラクト。」

「そうね。」

ホープの言った事にストレンジャーとアルドールは同意し、そう言った。

「ありがとうございます。 皆さん。」

「じゃあ今から行きましょうか。 私達がお運びしますので。」

「そうだな。」

アルドールとストレンジャーはそう言うと、ラクトの手を取った。

「アタシ達は海から行くわ。 先に行って。」

「後でな、ストレンジャー、ラクト。」

「はい、わかりました。」

「OK。」

ジョイの提案にラクトは返事をし、先にビーイングキャッスルへと向かって行った。

「じゃ、アタシ達も追いかけてみましょう。」

「そうだな。」

ピスフリーとジョイはそう言うとその場を走り出し、海からビーイングキャッスルを目指し始めた。

訪れた再開と事件

ビーイングキャッスル

ストレンジャーとアルドールに運ばれ、ビーイングキャッスル城へと到着した一行。先にホープは城の中へと入り、プレスル達に報告しに行った。

「ついで、ココがビーイングキャッスルだ。」

ストレンジャーとアルドールは先にラクトを地面へ降ろし、辺りを見つつ言った。

「うわあ、大きいんですね。ココでプレスルさんとティザーさんが？」

「ええ、住み込みの使用人をしているのよ。」

アルドールも同じように辺りを見渡しつつ、ラクトに言った。

「ふう、ついでついで。 疲れた〜」

すると、ストレンジャー達の後方から声がした。

そこには水の上に立っているジョイと、崖に手をかけ登っているピスフリーの姿があった。

「お前は決して動いてねえだろうが。」

「いいじゃないの、ついでだし。」

ピスフリーは自力で島へと登りつつ、ジョイに言った。

「ホープが先に中に入ったから、俺達も入ろうぜ。」

「そうね。」

ストレンジャーは先ほどまでの事を軽く話すと、5人は中へと入って行った。

城の中へ入ると、とても静かで辺りには誰の気配も無かった。

「えっと、何処にいるんですか？」

城内の様子を見つつ、ラクトは問いかけた。

「基本キッチンだな。あとはチェリーの部屋じゃないか？」

「チェリーさんって、プレスルさん達の雇い主ですか？」

「そうよ。ココの当主。」

ストレンジャーとアルドールはラクトの質問に答えつつ、部屋を目指して進んでいた。

「でもやけに静かだな。 使用人の数が減ったっていうけど、それ以上に。」

しばらく城の通路を歩いていると、ピスフリーはそう言った。

「確かにそうね。」

ピスフリーが言った事に対して、ジョイも同意した。

「！ スtrenジャー！！」

しばらく歩いていると、ストレンジャー達の後方から声がした。

5人はその場を振り返ると、1つの人影があった。

「？ ホネスティ。」

「どうしたの？」

そこへやって来たのはホネスティだった。

ホネスティは少し息切れをしつつ、5人の前に立った。

「アリス様が誘拐されたの！！」

「え！？」

ホネスティの言った事に対して、ストレンジャー達は驚きつつ言った。

「テュードの時と一緒にだな。 でもなんで誘拐って。」

「ご丁寧に手紙を残して行ったのよ。」

ピスフリーの言った事に対してそう言うと、ホネスティは持っていた封筒をストレンジャー達に手渡した。

<ココの当主、チェリー・ブロッサムは頂いた。

お前達と私どちらが勝つか、この少女をかけて戦ってもらおう。

明日の夜、偽装結婚式がある。 そこで少女を奪えなければお前達の負けだ。

もちろん参加は任意だが、お前らが負けたら大人しく少女を頂かせてもらう。

もし少女を奪還できたなら、破壊グループの最後の1人である俺は負けを認め

この世界から消えると約束しよう。 待っているぞ。 >

封筒に入っていた手紙にはそうかかれており、中には場所の描かれた招待状が入っていた。

「本格的な挑戦状ね。 相当自身があるって事かしら？」

「たぶんな。 その上対等な条件でわざわざこう仕掛けてきたという事は、あのグループとの最終決戦と言えるな。」

ジョイの言った事に対してストレンジャーはそう言うと、招待状に目を向けた。

そこには開かれる偽装結婚式の会場が書かれており、人数は無制限と書かれていた。

「プレスルさん達は。」

「私達を呼んだ？ コンストラクト。」

ラクトがそう言うと、後方からラクトの名前を呼ぶ声がした。

振り返ると、そこには

「ッ！！ プレスルさん！ ティザーさん！！」

「ラクト！！」

プレスルとティザー、そしてホープの姿があった。

ラクトはその場から走り出し、プレスル達の下へ飛び込んでいった。

「良かった、生きてて。」

「プレスルさん達こそ、お会いできてよかったです。」

ラクトは涙を流しつつそう言い、プレスル達に抱きしめられた。

ビーイングキャッスル 食堂

「でも良く生きてたな。 あの竜巻に巻き込まれて。」

ストレンジャー達一行は、ひとまず食堂へとやってきた。

プレスルとラクトは近くの席に座り、あの時の事を話していた。

「放り出された先が海だったので助かったんです。 ちょっと怪我しちゃいましたけど。」

「ココの傷ね。 大丈夫？」

ティザーは紅茶の入ったポットとカップが置かれたトレイを一時テーブルに置き、ラクトの古傷に触れつつ言った。

「はい、もう平気です。 今じゃコレがオシャレな感じの傷になりましたけど。」

「昔っからプラス思考だったもんな。 でもよかった。」

プレスルは少し嬉しそうにそう言うと、紅茶の入ったカップに手を伸ばし、一口飲んだ。

「昔の友人だったのか？ あの3人は。」

プレスル達の向かい側の席に座っているストレンジャー達は、そんなやり取りをしている3人を見つつホープへ問いかけた。

「らしいぜ。 昔住んでた島に漂流してきた鯨の子、それがラクトだったらしい。」

「昔の友人と再会か・・・ とっても嬉しかったわね、あの時。」

ホープからの説明を受け、ジョイがそう言いつつ紅茶を飲んだ。

「まあな。」

ピスフリーも同じように紅茶を飲みつつ、相槌を打った。

「それで、これからどうするの？ ストレンジャー」

ホネスティも同様に紅茶を飲みつつ、ストレンジャーに例の件について話しかけた。

「ああ、もちろん助けに行くぜ。 だが条件が2つある。」

ストレンジャーは飲み終えたカップをソーサーの上に置き、先ほどの招待状を封筒から出しつつ言った。

「1つは俺達のマスターであるラプソディは今回の件には不参加にする事。 コレはアイツからの指定だ。」

「ちっ、早速痛い所をついて来たな・・・」

ホープはストレンジャーの隣から招待状を見つつ、舌打ちした。

「そして2つめ。 この結婚式に参加できるのは女性人のみなんだ。 式にこういう指定をアイツはつけてきた。」

「女性人のみ！？ ゲホッ・・・ それって、あからさまにこっちがフリじゃないッ。」

ジョイは飲んでいた紅茶を一気に喉に流し込み、少々咳き込みつつ言った。

「それだけあいつらは追い込まれてるって事だ。 チェリーを除いて、マスターの作った俺達の中で女性人はイノセントを入れて5人。」

「それは俺達に負けを認めろって事か・・・ チッ、正当なんだか訳わかんねえぜ。」

ピスフリーも同様に舌打ちしつつ、紅茶を飲み終えた。

「さすがにアタシ達だけじゃ勝ち目は無いわね。 どうするの？」

一通りの話を聞き、アルドールはストレンジャーに問いかけた。

「会場に入る前衛組と、外であいつを抑える最終防衛ライン組、2つに分けて奪還しようと思うんだ。」

「でも5人でしょ？ 最終に張りすぎるのも難があるわね・・・」

「確かにそこが問題だ。 攻めないと外の組は動けない。」

ホネスティの言った事に対してストレンジャーはそういい、少し悩むそぶりを見せた。

「じゃあ、とある方法を使うしかないわね。」

ストレンジャー達のそばへとやってきたティザーは、不意にそう言った。

「とある方法って、何だ？ ティザー」

「攻め重視にするためにする方法。 それは後でご説明するわ。 まずは人数を集めましょう。」

ストレンジャーの言った事に対してティザーはそういい、ひとまず話を置いた。

「集合場所はココ、城内の食堂よ。 私とアルドールとホネスティ、そしてジョイはココに残って。 してもらう事があるから。」

「ええ、わかったわ。」

「そしてって何よ・・・」

「言葉のあやです。 ビリーブさん達の召集はストレンジャーさん達にお願いいたします。」

「ああ、わかった。」

ジョイの突っかかりを軽くスルーしつつ、ティザーはその場にいる全員に指示を出した。

「じゃあ俺は、テトラクリスタルアイランドに言って声をかけてくるぜ。」

「マスターに無断で行くのも気が引けるからな。 俺は一応声だけかけて、事情を説明して

くる。」

ピスフリーとホープは行く場所に検討を着け、そう言った。

「俺はコレージュに話をつけてくる。後はテュードか・・・」

「テュードには俺から話をつけてこようか？」

ストレンジャーがそう言うと、食堂の入り口から声がした。

「プロミス。出来そうか？」

そこにはプロミスが立っており、こちらに向かってきた。

「話は大体聞いた。任せろ、それくらいしか出来ないかもしれないからな。」

「わかった。じゃあ頼むぜ。」

「コレで行動は決まりました。じゃあ本日の黄昏時、ココに集合してください。」

「ああ、わかった。」

話と行動がまとまり、ストレンジャー達は後日の偽装結婚式に向けて行動を開始した。

ビーイングキャッスル内 食堂

時刻は夕方。

ピスフリー達に声をかけられ集合したビリーブ達と、事前に話を直に聞いたストレンジャー達それぞれが食堂に集合し、ティザーの作戦報告を聞く待機をしていた。

「お待たせしました皆様。 おそろいですね。」

不意に食堂の奥の扉が開き、ティザーがマイクを片手に入ってきた。

「話は一通り聞かせてもらいました。 僕達に出来る事があったら何でも言ってください。」

「で、作戦は何なんだ？」

ビリーブとコレッジはそう言うと、ティザーにそう言った。

「作戦。 それは。」

「単純明快、女装よ。」

「はああ！？」

ティザーとジョイが言った事に対して、会場にいた男子組み全員が声をそろえて言った。

「何でよりもよって女装なんだよ！！」

もちろんこの会場にいる全員がそう思っているだろうという考えを、ピスフリーは言った。

「この式に参加できるのは女性のみ。 そして現状では男子しか多くない。 そのためする事と言ったら。」

「女装・・・」

「はぁ・・・何を言うかと思ったらそれかよ・・・」

ピスフリーは少々呆れつつ、そう言った。

「で、アタシ達と女装する潜入組、そして男子のままで採取防衛ラインをする人達を含めて全部で17人。」

「防衛ラインは5人。それ以外は私達と一緒に式へと潜入いたします。」

「それ以外全員女装かよ!？」

「もちろんです。それ以外にいい案がございますか？」

ピスフリーが言った事に対してティザーは少々問い詰めるように言った。

「な、無い・・・」

「では決定です。事前に服はこちらでご用意させてもらいましたので、この中から似合うものをこちらからチョイスさせていただきます。」

ティザーはそう言うと、アルドール達は服の掛かったハンガーラックを引っ張り、中へと入れてきた。

そこには女性向け丸出しの見た目が可愛く、フリルがたくさんついた服がたくさん掛かっていた。

「潜入においてドレス必須ではないので、普通のものもご用意させていただきました。」

「結構まともだからね。コレから選ぶわよ☆」

ホネスティはそう言いつつ、自分の服を見せた。

『ぜってえ女装はしないからな・・・』

『5人だけか・・・元のままでいられるのは・・・』

『俺が外にいる。』

『抜け駆けはゆるさねえぞ!』

「ああ、ちなみに1つ言い忘れてました。」

女子組から少し離れた場所にいる男子達の小声の密談を予想してか、ティザーは付け加えた。

「グロウさんは事前にその5人に含まれているわ。」

「えッ！」

その言葉を聴いて驚いた男子組の視線は、一気にグロウに集まった。

「どうして？」

「体が大きすぎるんですもの。 それに見合った服が用意できなかったの。」

グロウからの問いかけに、ジョイはそう言った。

「じゃあ残るは4人か・・・」

「どうする？」

「話し合いじゃ拉致が開かねえ。 ジャンケン行っとくか？」

「結論、そうなるな。」

再び始まった密談の結末、ジャンケン決めとなった。

「ジャン、ケン、ポン！ 相子でポン！ 相子でポン！ 相子で・・・」

「やっぱり必死ね。 予想通り。」

そんな男子達の行動を見つつ、ホネスティは呟くように言った。

「そりゃあそうでしょ。 当たり前。」

「進んで女装する男子なんていないわよ。 普通。」

ジョイ達も口を合わせるようにそう言った。

「ビリーブはホネスティに任せるわ。 他の人達は背丈によってチョイスをして頂戴。」

「OK～」

冷静に状態を把握し、ティザーは指示を出した。

そしてジャンケンの結果。 男子のままでいられる事になったのは

「危ねえ・・・ 危うく危ない橋を渡るところだった・・・」

「同じく。」

「そう、ですね。」

「・・・」

ピスフリー、ホープ、ビリーブ、ブラベリーの4人となった。

「決まったみたいね。」

女子組はやり取りを終えたのを見計らい、男子組に近づいてきた。

「あ、ちなみにピスフリーとホープは強制参加ね。」

ホネスティはリストを見せつつ、そう言った。

「はああ!？」

「聞いてねえよそんなの!!」

もちろんそんなのに納得行くわけも無く、反論するピスフリーとホープ。

「問答無用。」

シュッ!

そんな2人にティザーは一言いい、ブラシを2人の目の前につけつけた。

「危ねっ!」

「ご主人様が危険な目にあっているのです。 身近な貴方達が自ら進んで作戦に乗り出さないのは、許されません。」

ティザーは目を光らせつつ、ピスフリーとホープに言った。

「チッ・・・」

「しゃあねえか・・・」

そんな行動にピスフリー達は観念したかのように言った。

「ねえティザー ストレンジャーはどうするの？」

「え、俺？」

一通りの修羅場が終わった後、アルドールはティザーに聞いた。

「龍の角は男性特有よ。さすがにコレは隠しきれないわ。」

「フードで隠すにしても、大きすぎるわね。」

ホネスティは持っていたフードをストレンジャーに被せつつ、駄目な事を照明した。

フードはギリギリ頭に付くか付かないかであり、どう見ても不自然だった。

「そうですね。 もちろん取り外しは出来ませんね。」

「あ、ああ。」

ティザーはそう言うと、軽くストレンジャーの角に触れて確認した。

根元がしっかりしており、触れただけでは簡単に外れない事を示していた。

「折っちゃう？」

「えッ!？」

ジョイが言った事に耳を疑いつつ、ストレンジャーは驚いた。

すると、

「さすがにそれは許されねえぞ、ジョイ。」

「俺達が女装するだけならまだいい。」

「だが体の一部を損失する行動は許されねえ。」

「ストレンジャーの角を折ってみろ。俺らが容赦しねえぞ！」

先ほどまで押され気味だった男子組が一気に口を開き、猛反論をしてきた。
そしていつのまにか、その手には各自の武器が持たれていた。

「もちろんその気はありません。殿方の大切な角を折るまで、この計画は難攻していません。
勝手な言葉は慎んでいただきましょう。」

最終的にはリーダーのティザーにそう言われる始末となった。

「じょ、冗談だってば・・・」

「言っている冗談と悪い冗談がある。覚えておけ。」

コレージはそう言うと、持っていた武器を消した。
その様子を見て、他の男子達も手に持っていた武器を消した。

「じゃあストレンジャーは防衛ライン組ね。よかった。」
「もしかして、そのために言ってくれたのか？」

アルドールが一安心すると、ストレンジャーは問いかけた。

「それもあるけどね。でも、ストレンジャーに女装はさせたくないから・・・ね。」
「あ、ああ。ありがとう。」

アルドールは少々言葉を詰まらせつつそう言うと、ストレンジャーは礼を言った。

「まあ防衛ライン組は大体決まっていたんだけどね。ストレンジャー、グロウは決定済み。」
「それとプレスル、ラクトは外で待機していて下さい。」

ティザーが手にするメモを見つつ、アルドールとティザーは言った

「あと1人は？」

「そうね。 さっきジャンケンで勝ったブラベリーでいいかしら？」

「最後は適当だな・・・」

ホープがそう言うと、女装を命じられた男子達はかけられた服の下見に向かって行った。

「ティザー、何で俺は外なんだ？ 使用人の俺らが一番重大なんだぜ？」

話が終わり、プレスルはティザーに問いかけた。

「もちろん尻尾に証拠が出てしまうこともあるわ。 でももう1つ。」

「理由か。 なんだ。」

ティザーの言いかけた事に対して、プレスルは聞いた。

「私達が駄目だった場合は、貴方に賭けるしかないのよ。」

「ティザー・・・」

少し顔を暗くするティザーの言った事に対して、プレスルは呟くように言った。

「今回の作戦、必ず成功させるわよ。」

「ああ、必ず。」

ティザーはそう言うと、プレスルは手を出した。

そして、2人だけの昔からの合図として、手を叩きあった。

訳有のゲームの始動

クライシスシティ周辺 ホテル『トゥインクル』の一室

ビーイングキャッスルで女装を欠けての人騒動が起こっている頃。
とある豪華なホテルの一室に、チェリーの姿があった。

「う、ううん……」
「気がつかれましたか。」

チェリーが目を覚ますと、何処からか声がした。
ゆっくりと体を起こしつつ、チェリーは辺りを見渡した。

「……ココは。」
「とあるホテルのスイートルームです。 チェリー・ブロッサム嬢様。」

眩くようにチェリーがそう言うと、前方から答えが飛んできた。

「貴方は……」
「すでにメンバーの全員が消去され、一人身となった服首領の1人だ。 名乗るほどの名前は持ち合わせていない、『ブラック』とでも呼んでくれ。」
「ブラック……さん。」

話を聞き、チェリーは寝ていたベッドの上から下りた。
ベッドの近くにあるテーブル席に座っている存在は、ブラックと名乗る『世界破壊グループ』の最後の1人だった。
姿は黒いモヤに近い形をしており、人方に近い形をとっていた。

「私に何の御用ですか、誘拐までして。」
「コレは一種の遊びだ。 貴方は今、とあるゲームの掛け金としてこの場に立っている。 片方の崩壊をかけたゲームに。」
「ゲーム……」

チェリーは少々警戒しつつ、ブラックの目の前のイスに腰掛けた。

「貴方には明日の偽装結婚式の花嫁として出席してもらおう。 その場でとあるゲームを行おうと思う。」

「生死をかけた、ゲーム。」

「貴方はどの道死ぬ事は無い。 デメリットは無いが、メリットがある。」

ブラックはそう言いつつ席を離れ、近くのテレビの電源を入れた。

テレビに電気が入ると、そこには何処かの風景が写されていた。

「私が勝ったら、ココにいる方と共に組織を作る手助けをしてもらう。」

「！！ お父様！！」

チェリーはその場を離れ、テレビの前へと移動した。

そこにはチェリーの父が立っており、透明のケースの中に保管されていた。

「とある行動中にこの方がコンタクトを取ってきてね、そのままの状態に保管している。」

「行方不明になった時と、同じ・・・ 老けていない。」

チェリーはそう言いつつ確認を終え、再び席に戻った。

「貴方様はゲームの勝者がどちらであろうと、この方と共に行動できるのだ。 メリットしかついてこない。」

「・・・そのゲームの対戦相手って、まさか。」

「ああ、あの城にいた存在達、そして近くの島に住む存在達だ。」

ブラックはそう言うと、チェリーの顔が引きつった。

「あの存在達がこのゲームに勝てば、貴方は父君と共に城へと帰れる。 だが負ければ、私と共に来てもらおう。」

「・・・」

「貴方に断る権利は無い。 だがコレだけは判ってくれ。」

ブラックはそう言うと、チェリーの元へ歩み寄り、方膝を付いた。

「自分はもう消えるべき存在だ。 どの道このゲームの結果の先に待つことは、貴方の平和だけだ。 組織の再結成は、もうどうでもいい。」

「！！ では貴方は！」

「ああ、もう時期消える。 隊長様がいなくなったこの時、俺達の力はどんどん失われている。 時期に消える事も、そう遠くはない。」

ブラックはそう言いつつ、見た目を紳士姿に変えた。

「それなら、マスターに頼んで。」

「それではあの方々に見せる顔が無い、もう消えると決めたんだ。 後悔はしていない。」

紳士姿に変えたブラックは軽く微笑み、チェリーを安心させた。

「ではどうして・・・」

「ゲームは私の趣味なんだ。 このゲームに負けて潔くココを去る。 それはとても気分がいいものなんだ。 勝ったら勝ったで、別の方法取るだけだ。」

「・・・わかりました。 そのゲームの掛け金として、演技をさせていただきます。」

「ありがとう、チェリー・ブロッサムこと、アリス。」

ブラックはそう言うと、チェリーの手に軽く口付けをした。

ビーイングキャッスル

女装作業を一通り追え、次の日の昼頃となった頃。

「お待たせ～ ストレンジャー」

食堂で待たされていたストレンジャー達は声を聞き、食堂の入り口に目を向けた。

「着替えさせ終わったわよ☆ じゃあお披露目時～」

ホネスティはそう言うと、横へとずれた。

『ウワッ・・・』

『可愛い。』

するとそこには、女装を完璧に終えたピスフリー達の姿があった。

「・・・」

「恥かしい・・・」

「言うな。」

ピスフリーとコレージは呟くように言うと、ストレンジャー達の下へとやってきた。

「どう？ 可愛いでしょー」

「軽くメイク等もしたけど、あんまり違和感無いでしょ？」

軽く楽しんでいる女子達をよそに、その場にいる男子達の周辺では気まずいムードが広がっていた。

「えっと・・・」

「可愛いね。」

グサッ

「ああ。普通に。」

グサッ！

「お疲れ様です、皆さん。」

グッサッ！

なぜかグロウ、プレスル、ラクトの言った事に何処からか効果音が聞こえ、女装している男性人の大半が倒れそうになっていた。

無理も無い。 慰めになっていないのだから。

「皆・・・大丈夫か？」

ストレンジャーはそう言うと、近くにいたピスフリーの元へとやってきた。

「・・・好きな感想言えよ・・・」

不機嫌丸出しの顔を口調のまま、ピスフリーはストレンジャーに答えを求めた。

「俺の変わりになってくれてありがとう、皆。」

「ストレンジャー・・・」

ストレンジャーがそう言うと、ピスフリーを含め数人の男子が涙目になった。

「その分俺らが本気でしっかり頑張るからな。 任せておけ。」

「あ・・・ ああ！」

バツ！

「おおっと。」

そう言うと、女装したままの姿でピスフリーはストレンジャーに抱きついた。

「俺らも出来る限り中で抑える。 時期が来たら女装を剥いで行動するつもりだ。」

「任せとけ。 スtrenジャー」

プロミスとコレージはそう言うと、いつもどおりの笑顔を見せた。

「ああ、わかった。」

半分泣いているピスフリーの背中を撫でつつ、ストレンジャーはそう言った。

「・・・そういえば、テュードはどうした？」

プレスルは女装組みを一通り見た後、ティザーに問いかけた。

「ああ、テュードなら外部班に回したわ。 服が似合なすぎるんですもの。」

「さすがにサングラスが取れないとなると、服のチョイスが難しすぎて。」

「そうか。」

プレスルがそう言うと、食堂の入り口に寄りかかっているテュードを見た。

「ま、外で派手にやらせてもらう。 任せとけ。」

そう言うと、テュードは食堂へと入り、ティザーの注いだ紅茶の入ったカップを受け取り、中身を飲んだ。

「作戦開始は今日の夕方。 外部班はこのポジションについて、外に出た敵を確保して頂戴。」

ティザーはそう言うと、全員に外部班のポジションが書かれた紙を渡した。

「ストレンジャーとラクトは正面玄関付近。 プレスルとグロウは裏口付近。 テュードとブラベリーは屋上で待機して。」

「ああ、わかった。」

一通り目を通し、プレスルは言った。

「あと、全員にコレを渡しておくぜ。 テイルスに頼んで全員分作ってもらったんだ。」

ストレンジャーはそう言うと、持っていた袋からトレジャースコープを出し、一人一人に配った。

「懐かしい。 まだあったのね。」

「こういう時に役に立つからな。 使い方は後で教えるぜ。」

全員に配り終わると、それぞれがポケットにしまった。

「コレで内部の様子もわかるわね。」

「よし、準備万端ね。」

メカを少し弄った後、ホネスティは笑顔で皆に言った。

「皆さん、とうとう今日ですね。」

すると、食堂の入り口から声がし、全員の視線が集まった。

「マスター」

そこにいたのはラブソディだった。

「自分は不参加にするよう指定されましたが、せめて見送りぐらいはしようと思って。」

「ありがとうマスター」

コレージはそう言うと、ラブソディの頭を軽く撫でた。

「それにしても、皆さん上手に服を着ましたね・・・ 普通に見ただけでは違和感無いですよ。」

女装組の男子を一通り見た後、ラブソディは呟くように言った。

「あんまり嬉しくない感想だけだな・・・」

少々顔を暗くしつつ、ピスフリーは言った。

「でもその様子だと、門前払いは無いな。」

「ああ、それだけでも作戦が有利になる。 頑張ろうぜ。」

「そうですね。」

ラブソディからの感想を聞き、女装組男子は少し自身を持ったように言った。

「ストレンジャー君。 頑張ってくださいね。」

「ああ。 必ずチェリーを連れて帰ってくるからな。」

「約束。」

ストレンジャーを応援したラブソディは指を出し、二人は指切りをした。

黄昏時の披露宴へ

ホテル『トゥインクル』 正面玄関前

クライシスシティの中心よりの場所に位置するホテルへと到着したストレンジャー達。

「じゃあ、ココからは別行動ね。」

アルドールはそう言うと、後方で控えていたストレンジャー達に言った。

今現在の彼女達は普段の私服とは違い、パーティ用のドレスをそれぞれが身に纏っていた。

《了解。 頑張れ、皆。》

「おう。」

ストレンジャーに励まされピスフリーはそう言うと、内部組はホテル内へと潜入して行った。

ホテル内部

「いらっしゃいませお客様方。 招待状をお持ちで？」

ホテルの正面玄関を通ると、警備員が近寄ってきた。

「はい、こちらに。」

ティザーはそう言うと、警備員に招待状を提示した。

「確かに。 では、どうぞごゆるりと。」

警備員は数歩下がり、ティザー達に道を開けた。

道を通され、ティザー達はゆっくりと進みだした。

すると

「？ そのマドモアゼル。」

急に警備員から声をかけられ、最後尾を歩いていたプロミスを止めた。
呼び止められたプロミスが止まると、ティザー達は数歩離れた場所で同じく止まった。

「えっ！」

『バレタか！？』「あ、はい・・・ なん、何か？」

普段から使い慣れていない言葉を使いつつ、プロミスは警備員に言った。

「ハンカチを落とされましたよ。」

拾ったハンカチを見せつつ、警備員は言った。

「あ、ありがとう、ございます・・・」

「いえ。 では、お気をつけて。」

プロミスはハンカチを受け取りそう言うと、警備員は下がった。

「ビックリしたー・・・ いきなりバレたかと思ったわよ。」

通路を歩きつつ、ジョイは小声でプロミスに言った。

「俺に言うなって。 まさか落ちたとは思わなかったんだから。」

プロミスは先ほど受け取ったハンカチをドレスのポケットに入れつつ、そう言った。

「でもあんまし違和感無かったな。 上手いな。」

「言うなッ・・・」

ホープに冷やかされつつ、プロミスは言った。

「この先何があってもおかしく無いわ。 皆、それなりに役作りを頼むわね。」

「はい、わかりました。」

ティザーはそう言うと、ビリーブが返事をした。

『ビリーブは普通だよな・・・』

返事を聞いた男子達は心とそう思いつつ、内部班は教会へと向かって行った。

ホテル外部

「結構危なかったな。」

「そうですね。」

先ほどのプロミスのやり取りを聞き、外待機のストレンジャーとラクトはそう呟いた。

2人はホテルの近くにある駅ビルの屋上に待機しており、トレジャースコープを着用して内部の様子を見ていた。

今回のメカに新しく搭載された『ステルスエリア機能』を2人は使用しており、プロミス達の持つメカの発信源周辺の映像を見ていた。

映像は画面に綺麗に写っており音声も聞こえるため、まるでそこにいるかのように視聴出来るのだ。

《大丈夫そうで良かったね、ストレンジャー》

すると、ストレンジャーの装着しているメカに音声 flowed。

「ああ。 グロウ達も配置についたか？」

《うん、少し前から待機してるよ。》

画面をグロウ達のいる場所へと変え、ストレンジャーはグロウとプレスルの様子を見た。

《さすがにマンション街の公園で2人がこんな時間にいたら、少し怪しまれるかもしれないけどな。》

「グロウが目立たない場所はそこだからな。 辺りにはまあまあ人がいるから、そこまで目立たないだろ。」

「こちらもすでに配置につきました。 ブラベリーさん達も配置についたと、先ほど連絡がありました。」

ラクトも同じく通信を聞き、グロウ達に答えた。

《まだしばらく待機だから、辺りを注意しつつ監視を続けよう。》

「了解。」

ストレンジャーはそういうと、一時通信を終えた。

「作戦まで何も無いといいな。」

「そうですね。」

呟く様にストレンジャーはそう言うと、ラクトは相槌を打った。

「ストレンジャーとラクト、仲いいね。」

通信を終えたグロウはそう言いつつ、隣のブランコに座っているプレスルに言った。

「ストレンジャーは基本誰とでも仲いいからな。 ラクトもそうだ。」

グロウから問いかけられた事を答えつつ、プレスルはブランコをこぎ出した。

「そうなんだ。 でもラクトって、どこか変わってるよね。」

「何がだ？」

ふとグロウがそう言うと、理由をプレスルは問いかけた。

「見た目は確かにストレンジャー達と一緒にんだけどね。 鼓動が少し変わってるんだ。」

「鼓動が変わってる？ ……ってか、お前そんな力があつたのか。」

「うん。」

グロウの言った事に疑問を抱きつつ、改めて知った能力にプレスルは感心した。

「なんかね。 僕達の本当のマスターの鼓動に似てるんだ。 人間に近いって、言えばいいのかな。」

「ああ。 そういう事か。」

プレスルは大体答えに推測がたつたのか、そう言いつつ再びブランコをこいだ。

「ラクトの本当の姿はアレじゃないんだ。 ラクトの種族はシービショップ、魚人だ。」

「あ、そうなんだ。 じゃあきつと、それが理由なんだね。」

「そうだな。」

グロウも同じ答えへと行き着き、プレスルに言った。

するとプレスルもそのように答え、会話は終わった。

《そういえばラクトは、プレスル達とどんな出会いをしたんだ？》

《え？》

ふとプレスルの耳に、通信機越しに聞こえてくるストレンジャー達の会話を耳にした。

《言いたくない事だったらいいんだ。 ただ、気になってな。》

通信先から送られて来る映像を切り替え、プレスルはストレンジャーとラクト周辺に画像を切り替えた。

二人はどこかのビルの屋上に立っており、柵に手を預けて話をしていた。

《まあ気にするな。 ただの独り言と思ってくれ。》

《あ、いえ。 そんな事は無いですよ、ただビックリして。 どうして聞きたくなったんですか？》

先ほどから同じような立ち方をしたまま、ラクトは問いかけた。

《その胸に描かれた珊瑚の刺青、自然に作ったものじゃないんだろ？ 顔の左にある傷も、多少気になってな。》

《あ、そうだったんですか。》

ストレンジャーに指摘された傷を撫でつつ、ラクトは言った。

《これは、僕がプレスルさん達と離れ離れになってしまった時の災害で出来た物です。 刺青は、自分で。》

《竜巻か・・・ でも、どうして刺青を胸に入れたんだ？》

ある程度ホープから聞いた事をストレンジャーは呟き、別の事を問いかけた。

《自分がプレスルさん達ともっとも仲良くなったのは、あの島にある珊瑚礁の近くだったんです。理由はそれだけ。》

ラクトは自分の胸に描いた珊瑚を指で撫でつつ、そう言った。

《その珊瑚礁。 きっと凄く綺麗だったんだろうな。》

《？ なぜそう思うんですか？》

ふとストレンジャーの言った事に疑問を抱き、ラクトは問いかけた。

《プレスルとティザーの言った事に加えて、大切な思い出を体にも残したくなるほどの場所だからな。 そう思ったんだ。》

《そうだったんですか・・・》

『珊瑚礁か・・・ 懐かしいな。』

ストレンジャーが言った事を聞き、思い出の場所の事をプレスルは思い出していた。

あの時の平和

プレスルとティザー、そして以前までチェリーの城で共に働いていたリザードマン達が住まう少し大きめの小島。

その島は機構は穏やかで住み心地がよく、比較的寒い所が苦手な彼らが住むにはもっとも適した島でもあった。

島に生える植物での生活も出き、海辺が近くにあると言う事から魚を採って食事をする者もいたほど、恵まれ静かな場所だった。

暖かい場所特有のスコールが降る事は多々あったが、台風や地震といった大規模な災害は特に無く、平和だった。

プレスルとティザーはそんな島で暮らす普通のトカゲだった。

族長といった特殊な立ち位置と言うわけでもなく、一般市民に近い位で、自給自足の生活を送っていた。

住む家が近くと言う事もあり、二人は幼馴染と呼べるほどの仲よしだった。

小さい頃からの仲と言う事もあり多少の喧嘩もする事があったが、それも稀でもあり、仲良く生活している方が多かった。

ラクトが島に来たのは、プレスルとティザーが今の年になる数年ほど前の事。

プレスルはいつも通り過ごしており、その日も釣りを楽しんでいた。

「う、うう～ん・・・ 今日もいい天気だな。」

島の入り江から伸びた栈橋付近。 プレスルはその橋の先に座り、釣り糸を垂らして座っていた。

本日の収穫は魚が数匹だったが、それでも満足な様子で、プレスルはご機嫌だった。

「プレスル、今日の釣りはどう？」

そんなプレスルの元へとやってきたティザー

今の彼女はメイド服では無く、上下の分かれたワンピースに近い服を着ていた。

「ああ、今日もいい勢いで釣れてるぜ。 まだ数時間なのにこの数だ。」

「うわぁ、今日も大量ね。 夜はムニエルにする？」

プレスルのそばに置かれたバケツの中の魚を見つつ、ティザーは嬉しそうに言った。

「いいな。あとステーキも欲しいな。」

「いいわよ。じゃあ後で木の実も採ってこよっか。」

新たな要望をプレスルから聞き、ティザーはOKサインを出しつつ言った。

「・・・？ プレスル、あれ見て。」

「なんだ？」

ふと、海を見ていたティザーは何かを見つけプレスルに声をかけた。

ティザーが指を差した方向の海面には、一つの影が浮かんでいた。

「あれ、海草とは違うわよね。何かしら？」

遠くを見るような仕草をとりつつ、ティザーは言った。

「ああ、違うな。・・・ちょっと俺見てくるから、これ頼んでもいいか？」

「え、ええ。」

ティザーに釣り糸を回収した釣竿を渡し、プレスルは海に飛び込んだ。

ジャッバーン！！

「プレスル、大丈夫？」

「プハッ・・・ ああ、任せろ。」

海面に顔を出したプレスルにティザーは声をかけると、プレスルは返事をし、影目指して泳いで行った。

ティザーはその場に立ったままプレスルを見ていた。

数分後、プレスルは海面に出た影を回収し、両手で運びつつティザーのいる栈橋へと戻ってきた。

「お帰り・・・ って、さっきの影はそれ？」

「ああ、そうだ。」

帰ってきたプレスルに声をかけたティザーは、プレスルの持っていた物を見て少し驚きつつ言った。

それは、綺麗な蒼色の肌に、どこかで見たようなヒレを持ったサメだった。

「サメよね、それ。　・・・でも普通のサメじゃないわね。」

「今は気を失ってる。　手も足もあったから、多分ただのサメじゃないのは確かだな。」

気を失っているサメをプレスルはいったん棧橋の上に上げ、そう言った。

サメは確かに気を失っていたが、呼吸はしていたため生きている事は確認が取れた。

「とりあえず、家に運ぶか。　手当てとかもしないといけないだろうしな。」

「そうね。」

プレスルの提案を受け、ティザーはそう言った。

2人は協力して家へと運び、サメの手当てをしていった。

それが、コンストラクトとプレスル、そしてティザーの最初の出会いだった。

手当てと言っても簡単にタオルで体を拭き、包帯を巻く程度の事だ。

幸いラクトには致命傷と言えそうな大きな怪我は無く、疲労によって気を失っていると推測出来た。

プレスルが晩御飯用の木の実を取りに行ってる間、ティザーはラクトの寝ているベットのそばで待機し、目が覚めるのを待っていた。

「まだ目を覚ましそうに無いか？」

木の実を取りに行ったプレスルが家へと戻ると、部屋にいたティザーに声をかけた。

「ええ。　うなされてる事も無いし、普通に疲れてるだけなのかもしれないわ。」

「疲労か・・・　どうしたんだろうな。」

ティザーからラクトの現状態を聞き、プレスルはそう言いつつ木の実をキッチンへと持って行った。

すると、

「う、ううーん・・・」

ベットに寝かされていたラクトが目を覚ましだした。

「あ、気がついたわ。」

ベットのそばへと移動したティザーはそう言いつつ、ラクトの顔を少し遠くから見た。

「・・・あれ。 ココは。」

「俺の家だ。 気分はどうだ？」

プレスルも同様にベットのそばへと移動し、ラクトに声をかけた。

「僕、何してたんだっけ・・・」

ベットの上に座っているラクトは、そう呟いた。

寝ている前までにとっていた行動を思い出そうとしている様だった。

「海面にうつ伏せで漂ってたのよ、貴方。 大丈夫？」

「あ、はい。 体は大丈夫、ッ・・・」

体を動かそうとしたラクトはそう言いつつ、痛む腕を抑えた。

「大丈夫か？ 腕、痛むのか？」

ラクトが抑える腕に触れつつ、プレスルは言った。

「す、少し・・・」

「・・・ちょっと捻ったみたいだな。 痛いかもしれないが、我慢してくれ。」

プレスルはそう言うと、ラクトの腕を掴み、正しい位置へと一気に曲げた。

グッ

「クッ！」

捻られた場所から激痛が走り、ラクトは痛そうに唸った。

「ちょっ、プレスル！」

「よし、戻ったぜ。 どうだ？」

ティザーの言った事を軽く流しつつ、プレスルはラクトに言った。

「えっ？」

プレスルに言われラクトは腕を曲げてみた。

すると、先ほどまでの痛みは無くなり、スムーズに腕を曲げられるようになっていた。

「凄い、治ってる……」

「お前、ただのサメじゃないんだろ？ だったらコレで直ぐに治ると思ってな。 痛い思いさせちまったけどな……」

ラクトにやった行動の動機を説明しつつ、プレスルは謝った。

「ううん、いいんです。 治してもらった事には変わりありませんから。」

「そっか。 ゴメンな。」

ラクトがそう言うと、プレスルは顔を明るくしつつ再び謝った。

そして、2人は笑顔で笑った。

「あ、名前まだ言ってなかったな。 俺はプレスル、プレスル・ザ・リザードだ。」

「私はティザー・ヒール。 ティザーとお呼びください。」

ふとプレスルは思い出したかの様に、ラクトに自己紹介をした。

「プレスルさんとティザーさんですね。 僕はコンストラクト・ザ・コーラルといいます。 長かったら、ラクトと呼んでください。」

「ラクトか。 よろしくな。」

「はい。」

ラクトも同じく自己紹介をした。

「でも、どうして僕が普通のサメじゃないってわかったんですか？」

時間が流れて夜。 プレスルの家で食事を取っている3人は会話をしていた。ふとラクトは腕を治してもらった時の事を思い出し、プレスルに問いかけた。

「まあ腕と足が生えてた事でも、普通じゃないとは思ったんだけどな。 陸に揚げても呼吸しにくく無い所から、そう思ったんだ。」

「そっか。 普通の魚類なら、陸では生活出来ないものね。」

プレスルの言った事を聞きつつ、ティザーは相槌を打った。

「気を失ってた時、顔は水中に向いてた。 って事は、水中でも陸でも呼吸できるって事だろ。 そこからだな。」

「そうだったんですか。」

一通りの解説を聞き、納得するようにラクトは言った。

「僕はシービショップと言う種族のサメです。 魚人と言った方が、わかると思いますけど。」
「魚人だったのか。 なるほどな。」

ラクトの種族を聞き、プレスルも同じく納得するように言った。

「皆さんも、普通のトカゲでは無いんですか？ その様子だと。」

ふとラクトはそう思い、プレスル達に問いかけた。

「俺らはリザードマンだ。 トカゲだが、ちょっと特殊だな。」

「ココの島に住んでるのはリザードマンだけよ。 貴方はちょっとした、お客様ね。」

ティザーはそう言うと、食事の済んだ皿を回収しつつ言った。

「そういえば。 ラクトは今、帰る所があるのか？」

食事を済ませ、ティザーが食器を洗っている時、プレスルはラクトに問いかけた。

「・・・いえ。 僕には元々、家は無いんです。」

プレスルからの問いかけに、ラクトは少々顔を暗くしつつ答えた。

「家が無い？ 何でだ？」

「独り身、なんです・・・」

ラクトはそう言うと、目に涙を浮かべ始めた。

「・・・」

「家族は居ない・・・ 僕は、一人なんです・・・」

眩く様にラクトは言うと、涙を流した。

流れる涙をひたすらラクトは拭ったが、それでも涙は流れ続けた。

バツ！

「え・・・？」

すると、泣いているラクトをプレスルが抱きしめた。

「今は一人じゃねえだろ。 何で泣くんだ？」

ラクトを抱きしめたまま、プレスルは問いかけた。

「か、帰る場所が・・・ 無いから・・・」

「だったら、ココに居ろよ。 俺らがずっと、ラクトを見守ってやるからさ。」

ラクトからの答えを聞き、プレスルはそう言った。

「もう一人じゃねえよ。 お節介なら、知らないうちに姿を消してくれてもいい。 俺はラクトを、一人にしない。」

「プレスルさん……」

「男なら泣くな。 全身蒼だからって、涙が似合うわけじゃないんだからな。」

「うん……」

プレスルがそう言うと、ラクトは顔を赤くし、抱きしめ返した。

「ココに居ても、いいですよね……？」

流していた涙を拭き、ラクトは改めてプレスルに問いかけた。

「ああ、誰も否定しない。 安心しろ。」

「……はい。」

ラクトはプレスルの答えを聞き、安心感に浸っていた。

「お取り込み中悪いんだけど。」

2人が一通りのやり取りを終えた後、ティザーは声をかけた。

「なんだ？」

「そろそろ月がいい場所に居るだろうし、あの場所綺麗なんじゃない？ 今日満月だし。」

「ああ、そうだな。」

ティザーはそう言うと、ラクトの頭を軽く撫でた。

プレスルも同様に頭を撫でると、一足先に入り口へと移動した。

「貴方に見せたい物があるの。 一緒に来てくれない？」

「あ、はい。」

ラクトはそう言うと、ティザーと共にの入り口に移動していたプレスルの元へ行き、とある場所へと向かって行った。

3人が家を出て数分後。

出会った海辺とは逆方向にある入り江へと、3人は進んでいた。

「そういえば、何処に行くんですか？」

まだ行き先を知らないラクトは、先を歩くプレスル達に問いかけた。

「素敵な所よ。 私達の秘密の場所。」

「満月の夜だと、より綺麗に見えるんだぜ。」

プレスルとティザーは口々にそう言うと、両者の顔を見て笑顔になった。

ラクトはそんな2人を見て、少しワクワクしていた。

「ついたぜ。」

先に着いたプレスルは、その場所を見てラクトに到着した事を告げた。

「うわぁ！！」

プレスルに告げられ、ラクトはその場所を見ると歓声を上げた。

着いた場所、それは海の中に広がる綺麗な珊瑚礁がある入り江だった。

少し深めの海の中には、色鮮やかな珊瑚礁が生えており、空に浮かぶ月の光で輝いていた。

まるで海の中から、光を放っているかのようだった。

「凄い珊瑚礁・・・」

「な、凄い場所だろ？」

ラクトが呟いた言葉を聴き、プレスルは嬉しそうに言った。

「私達が見つけた、自然のままの珊瑚礁よ。」

「たまにココに来て、しばらく風景を楽しんでたりするんだぜ。」

プレスルがそう言うと、ティザーは嬉しそうにプレスルの腕に抱きついた。

「でもいいんですか？ そんな特別な場所に僕が来て。」

一通りの風景を楽しんだ後、ラクトはプレスル達に問いかけた。

「当たり前だろ。 ラクトは今日から一緒に過ごす家族なんだからさ。」

「大切な人にも、この場所を知ってもらいたかったのよ。」

「大切な、人……」

プレスル達にそう言われ、ラクトは眩くようにそう言った。

「一緒に過ごそうぜ、ラクト。」

「もう貴方は、一人じゃないのよ。」

「……っ！ はい！」

2人にそう言われると、ラクトは満面の笑みで答えた。

『大切な…… 人……』

だがその幸せは、長くは続かなかった……

そう、あの災害が来るまで。

悲劇の嵐

そう、それは突如やってきた。
今まで島にやって来たことの無い、大きな台風がやってきたのは。

「ラクト！　しっかり！！」

島に直撃した、大型の台風。
その風は島に住む存在達を襲い、全員を恐怖へとおとしいれた。
風に吹かれただけで体が浮かび、どこかへ飛ばされてしまうと思うと、人々は大人しくしている事が出来無かったのだ。
作られた木造の家はどんどん破壊され、家にいる事も危険とされていた。
島に住むリザードマン達は支えがしっかりしていると思われる木々に掴まり、必死に風から耐えていた。
プレスル達はと言うと、風に一旦あおられ、いつも釣りをしている栈橋にしがみ付いていた。
高波に時々襲われ、全身がずぶ濡れになっても、呼吸が苦しくなっても、必死に耐えていた。
災害から逃れるすべは、これしかないのだ。

「手離すんじゃねえぞ！」

プレスルは近くの栈橋にしがみ付いているティザーに言った。

「解ってるわよ！　でも酷すぎるわこの風！」

強風で髪型が徐々に乱れていくせいか、ティザーは台風に向かって文句を言った。
もちろん返事はないが。

「ラクト！　大丈夫か！！」

ティザーが大丈夫そうな事を確認し、今度はラクトの心配をした。
2人のいる栈橋から少し離れた場所、もっとも陸から離れた場所の足に、ラクトはしがみ付いていた。
プレスル達と違って、高波に襲われても呼吸面では平気だが、2人よりも軽いため、風には弱かった。

「は、はい！！ 大丈夫です！！」

必死にしがみ付きつつも、ラクトはプレスルに返事をした。
だがその顔は無理をしている表情も出しており、捕まる事が精一杯の様子だった。
その後、身の毛のよだつ音が

バリバリッ！

栈橋付近の3人に、何かが破壊され、引きちぎられる音が周囲に聞こえた。

「うわっ！！」

それとほぼ同時に、ラクトの声がした。

「ラ、ラクト！！」

ラクトの捕まっていた栈橋の支柱が壊れ、支えを一つ失った板が上がり、ラクトが宙に浮き上がったのだ。
それを見たプレスルは、危険を覚悟の上で手を伸ばした。

「プレスルさん！」

「ラクト！！」

一瞬の出来事だったにもかかわらず、2人は手を出した。
だが、手は宙を泳いだだけだった。

「プレスルしっかり！！」

「わかってる！！」

それを見たティザーはプレスルに言い、再び手を捕まえようと行動した。
何回やっても2人の手は届かず、何回も宙を泳いだ。
強風と高波に邪魔されつつも、2人は手を出し、必死に捕まろうとした。
だが、

バキッ！

再び何かが壊れる音がした。

「うわああ！！」

それとほぼ同時に、ラクトが叫んだ。

『しまった！』

「ラクトさん！！」

ラクトは台風の強風に巻き込まれ、空へと飛ばされてしまった。

プレスルとティザーはラクトの名前を呼んだが、声は届かず、台風はラクトを連れ去り、去ってしまった。

しばらくすると、風は段々と収まり、波も穏やかとなった。

再び平穏な時間となったのは、それから約2時間した後だった。

「・・・ラクト。」

プレスルは栈橋の壊れた部分を見つつ、涙を流した。

栈橋の板は無残にも壊れた姿となり、引きちぎられた様な形となっていた。

支柱をよくよく見ると、切れた部分が腐食していることが、明らかとなった。

「プレスル・・・」

「俺が・・・ 早くラクトをそばに寄せていれば・・・こんな事には・・・」

ティザーが後ろで心配していると、プレスルは呟く様にそう言った。

普段では見られないその姿を見て、ティザーは声をかけるにもかけられなかった。

島の破損状況は酷かったものの、幸い死傷者は出なかった。

飛んできた家の一部等で負傷した者はいたものの、今回の台風での死傷者はいなかった。

だが、行方不明者が出てしまった。

コンストラクト・ザ・コーラル ただ1人だけ。

「・・・プレスル、貴方は悪くないわ。 棧橋が腐食してたのは、海水によるものなのだもの。」

「だが・・・助けられなかった事には変わり無い。 俺はどうして・・・何も出来ないんだらう・・・」

ティザーは慰めようと、プレスルの隣に座り、肩を寄せた。
プレスルはただただ涙を流し、ラクトの事を考えていた。

「貴方は出来る限りの事をしたわ。 必死に彼を助けようとした。」

「・・・」

「元気出さないよ。 貴方の涙をずっと見てたら、私きっと、貴方を殴るわ。」

表情には出さないものの、ティザーはそのままの表情でそう言った。

その顔はいつもと変わらないが、涙目だった。

泣きたいのは、プレスルだけじゃないと言う事を、知らせているかのように。

「・・・すまない。」

プレスルもその言葉を聴き、改めて泣いている事を知り、涙を拭った。

「探しましょう。 きっとあの子ども、そう考えてるわ。」

ひとまず泣き止んだプレスルを見て、ティザーは涙を見せないように拭いた。

「・・・そうだな。 せめて安否を、知りたい。 アイツは、俺達の家族だ。」

「ええ。」

プレスルはそう言うと、ティザーと共に立ち上がった。

そして、2人はその日を境に、いろんな場所でラクトを探す旅へと出かけたのだった。

住んでいた島の人の許可を得て、2人は宛ての無い旅へと出かけて行った。

時に山を登り、海を渡り、苦手とする氷山を越えて。

必死にラクトの行方を捜した。

だが、いくら探しても、彼が居たとされる場所や行方、手がかりすら掴めない状態となっていた。

完全に手詰まり。宛ても無いのだから、しかたが無いのかもしれない。

その頃だ。チェリーの父親である財閥の当主に会い、城の使用人として雇われたのは。

「・・・スル。 プレスルってば。」

『？』

ふと自分の名前を呼ぶ声がし、プレスルは目を開けた。

するとそこには、自分の顔を覗き込んでいるグロウの姿があった。

「グロウ・・・」

再び現実世界に戻され、プレスルは目を覚ましたように呟いた。

「そろそろ皆が式場に配置し終える頃だよ。 しっかり見てよ。」

「あ、ああ・・・」

グロウにそう言われ、映し出されている式場内を見た。

ティザー達がそれぞれの位置のベンチへと座り、奪還の体制へととなっていた。

まだ当の本人と誘拐犯は居ないものの、準備に越したことは無い。

『そうだ・・・ 今の俺がする事は、チェリー様を助けることだ。 しっかりしないとな。』

現実世界へ完璧に意識を戻し、プレスルは気合を入れなおした。

その後、プレスルはメカの写すディスプレイを切り替えた。

『・・・ラクト。 自力で見つけられなかった分、俺はココで頑張るぜ。』

心の中でラクトに言いかけるように、プレスルは言った。

《皆。 そろそろ新郎新婦が現れるわ。 体制を万全にして、挑みましょう。》

《了解！！》

そして、皆の意識が1つになった。

全ては月明かりの元で

ホテル『トゥインクル』 式場内

プレスル達とは違い、直接ホテル内へと潜入したティザー達。
それぞれが華やかなドレスや服装を身にまとい、チェリーを奪還すべく行動していた。
今は婚姻の儀式が行われる予定であり、奪還予定の協会内にいた。

《後方、配置完了。》

《席前方、配置完了しました。》

《裏口の配置も完了だ。 いつでもいけるぜ。》

今回の作戦のリーダーであり指揮官であるティザーの元へ、次々と配置完了の連絡が入った。

「了解よ。 奪還時はチェリー様が通路中央に来た時。 合図はプロミスアクションと同時に
行おうわ。 プロミス。」

《了解。 いつでも行けるぜ。》

ティザーからの指令を受け、プロミスは了解を示した。

今回のプランとは、簡単に周りに騒動を起こし、それと同時に花嫁であるチェリーを奪還するこ
とだ。

もし相手が外へチェリーを連れて脱出したとしても、外にはストレンジャー達がいる。
こちらが敗北する確立は五分五分。 たとえ相手が1人であっても、油断が出来ない。

「これより、新郎新婦のご登場です。 皆様、盛大な拍手でお出迎え下さい！」

挙式の進行役がそう言うと、教会内は拍手の音で満たされた。

『いよいよ・・・ 来る。』

式に潜入したピスフリー達は、拍手をしつつそう考えていた。

ガチャン・・・

すると、協会入り口の扉が開け放たれ、2人の人影が立っていた。

新郎役である今回の敵『ブラック』と、新婦役のチェリー

協会内のピアノから奏でられる華やかな音楽と共に、2人は足を進めた。

『えっ！』

来た人物がチェリーだと知っていたピスフリー達は、彼女の姿を見て驚いていた。

いつものワンピース姿とは違い、彼女は純白のウェディングドレスを身にまとい、髪は纏められ、肩までの純白のヴェールで整えられていた。

手には何処から調達してきたのか、星屑草と鈴蘭のブーケが手にされており、胸元には桜をモチーフとした銀のネックレスが飾られていた。

ドレスの後ろには大きなリボンがついており、その中心には同じく銀製の桜形の装飾が施されていた。

『あ、あれが・・・ アリス様??』

『すごい美人・・・』

『チェリー・・・ なのか?』

彼女の清楚さと可憐さを引き立てているドレスを身にまとっているため、ピスフリー達は一瞬任務を忘れ、見惚れてしまっていた。

だがそれも束の間、

《皆。 今回のプロジェクト、確実に成功させるわよ。》

通信機越しに聞こえたティザーの声により、会場内にいたピスフリー達は我に帰った。

「いっけね。」

その声を聞き、ピスフリー達は気合を入れなおした。

《チェリー様が中間に来た時、開始よ。》

「了解。」

ティザーがそう言うと、開始の担当を任されていたプロミスがそう言い、全員がスタンバイに移った。

その間も挙式は進行しており、新郎新婦はゆっくりとした足取りで奥へと向かっていた。

一歩、また一歩

そして、2人が丁度協会内の通路中央へと来た時。

『ミッション、開始！』

全員がそのタイミングを見て、プロミスは持っていた煙幕筒を、ドレスから出し中央通路へと向かって投げた。

プシュウウー！

地面に着地したのとほぼ同時に、煙幕筒から煙が漏れ出し、会場内を薄い靄で包みだした。

「何事っ！？」

会場内にいた関係者達は、煙を見た直後、パニックになっていた。
そしてそのまま、新鮮な空気のある外へと向かって進みだした。

<・・来たか。>

「偽新郎！ チェリーを返してもらおうか！」

その煙を見た直後、新郎役であるブラックは何かを察し、声の聞こえた方向を見た。
するとそこには、ドレスを身にまとったピスフリーとコレージが立っていた。

<ほお、女装してまでココへ潜入したか。 意外だな。>

「何とでも言え！」

2人は同時にそう言うと、着ていたドレスの端を掴み、一気に脱ぎ捨てた。
事前に背中中のチャックは下ろされていたため、ドレスはすんなり脱げ、いつものスタイルのピスフリーとコレージが立っていた。

「こっちの方がよっぽど落ち着くっての！」

「すでに包囲は完了している。 抵抗は止めて、花嫁を渡してもらおうか。」

マントと冠を身にまとったコレージがそう言うと、客席にスタンバイしていたプロミス達もドレスからいつものスタイルとなっており、それぞれ武器を手にして新郎を見ていた。

「抵抗は止めなさい。 出ないと、貴方が消える事になるわよ。」

「貴方が私達に敵対していた組織の一員だと言う事は、知っているわ。」

ティザー達はドレスのまま武器を持ち、ブラックに向かって言い放った。

<フッ 終焉はこうでなければな！>

ブラックはそう言うと、隣にいた花嫁役のチェリーを抱きかかえ、その場をジャンプした。

「逃がすかっ！」

それを見たコレージは同じくジャンプし、双剣を手にして新郎に向かって行った。

<残念。>

コレージが追って来る事を想定していたからか、新郎は持っていたボールをコレージに向かって投げた。

「チッ！」

向かってきた標的を見て、コレージはボールを切った。

ボンッ！

<ハズレだ。>

「何っ！」

コレージが切ったのとほぼ同時に、ブラックはそう言った。

ボールはただのダミーであり、切ると会場内に大量の粉を撒き散らした。

「ちょっ！ ゲホゲホッ・・・」

「前が見えませんっ！」

その粉の影響で、下にいたジョイ達には小麦粉に近い粉を直に浴び、視界が白くなった。

「小癪な真似を！」

新郎が協会のスタンドグラス付近に立ったのを見て、コレージは跳んだ先の壁をそのまま蹴り、ブラックに向かって攻撃をした。

<甘いな。>

すると、敵は空いた片手に再びボールを持ち、足元に向かって投げた。再びボールからは粉が飛び出し、コレージの視界を奪った。

「くそっ！ ゲホゲホ・・・」

<じゃあな！>

ガッシャーン！

「ま、待て！！」

コレージの様子を見た後、新郎は花嫁片手にスタンドグラスを突き破り、夜の空へと飛び出して行った。

「この時を待っていたぜ！」

「逃がさないよ！」

すると、新郎が飛び出した先にはすでにグロウと、グロウの背中に乗ったプレスルが上空にて待機していた。

姿を確認した後、グロウはブラックに向かって突撃して行った。

<残念、それも想定内だ。>

グロウの行動を見て、ブラックはそう言いつつスーツの上着を脱ぎ捨て、装備していた短剣を2人に向かって投げ放った。

「うわぁ！」

「グロウ、上昇だ！」

剣を見て同様したグロウを見て、プレスルは指示を出し移動させた。するとその隙を突いて、2人はそのままビルの上に着地した。

「次は俺らだ！」

「覚悟・・・！」

新郎が休む暇も与えず、ブラベリーとテュードは武器を手にし、襲い掛かった。

<それも計算内。>

新郎はそう言うと、ズボンの裾から煙玉を落とし、爆破させた。

「なっ！」

「諦めるかぁ！」

視界が白くなったのも束の間、テュードは休まず敵を確認したポイントに向かって、鎌を振り下ろした。

ガンッ！

「！ いないっ！」

<残念。>

テュードが攻撃する前に、すでに2人は移動しており、別のビルの屋上へと移動していた。

「それで、逃げたつもりか？」

視界を奪われたテュードは目を瞑り、気配を察しつつ言った。

<ああ。 お前らはもう動けない。>

「何っ！」

ブラックはそう言うと、ブラベリーとテュードに付着した白い粉に粘り気が発生し、2人の移動を封じた。

「動、けない！」

「ちっ！ これでも喰らえ！」

身動きが取れなくなったテュードは、最後といわんばかりにサングラスに手を当て、レーザーアイを放った。

だがその攻撃も、固定された首からの発射に過ぎず、敵は軽く回避した。

「まだ僕達がいるんだからね！」

その様子を上空で見ていたグロウは言うど、再び敵に向かって攻撃を開始した。

<そうだな。>

「！ よせグロウ！」

「え！？」

ブラックが言った事に対して不審に思ったプレスルは、グロウに攻撃を止める様言った。だがその忠告は数秒遅く、2人もブラベリー達同様に、粉の餌食となってしまった。

《うわあ！ と、取れないよー！》

《チッ！！ ここまでか！》

その様子を見つつ、ストレンジャーとラクトは移動をしていた。
敵の座標はスコープで確認出来ており、見失う事は無かった。

「早い！」

だが相手のスピードは速く、空を飛ぶ方が早いストレンジャーでも追いつく事は出来ず、段々と距離が広がっていく。

《ストレンジャー！ ラクト！ こっちはもう動けねえ！》

《頼む！ 食い止めてくれ！》

『追いつかない！』

通信機越しに流れてくる全員の声聞き、ストレンジャーは必死に追いかけた。

<終わりだな。>

その様子を、ブラックは逃げつつ確認し、成功を確信した。
誰もがそう思った。

だが、

シュン！

『え・・・？』

次の瞬間、ストレンジャーの飛んでいた横を、何かが通り過ぎ、敵に向かって行く影が現れたのだ。

ストレンジャーよりもはるかに背が高く、体系の良い足腰に、揺れる先別れのした尻尾。
その尻尾には、ヒトデ型の模様が入っていた。

<何っ！>

新たな敵の出現に、ブラックは焦った。

自分を追いかける龍以外にいた敵は、視界には入らなかったのだ。

影は猛スピードで自身に接近し、手にしていた大型の斧で切りかかった。

「消えろっ！」

シャッ！

<ぐあああ！！>

振られた斧の剣刃が体を引き裂き、ブラックはそこから徐々に消滅し始めた。
すでに体系を維持しているだけでも精一杯だたため、体はどんどん消えだした。

「・・・終わりだ。 夢の花婿。」

攻撃をされた時に離してしまった花嫁役であるチェリーを抱えつつ、現れた影はそう言い放った。
。

<終焉は、儚いもの・・・ だな・・・>

ブラックはそう言うと、宙を逆さに落下しつつ、その体を消して行った。

その後しばらくして、ストレンジャーは空に浮かぶ満月をバックに立つ、影の元へとたどり着いた。

手にはウェディングドレスを身にまとい、気を失っていたチェリーが丁寧に抱えられていた。
何処からか風が吹くと、2人の身に着けていた衣服が風に靡かれた。

「・・・」

「俺が誰なのか、解からない様子だな。 ストレンジャー」

自分の下へと辿りつき、かける言葉を捜すストレンジャーに対して、影はそう言った。

「！ その声・・・ ラクトなのか？」

「ああ。 これが俺の本来の姿さ。」

ラクトと言われ返事をした影は、チェリーを安全な場所へと降ろし、ストレンジャーを見た。
頭には先ほどまでラクトが身に着けていた赤いバンダナがあり、頬には3つの切り傷、胸元には

刻まれた珊瑚の刺青が胸筋にそって浮き出ていた。

腰には白を主体とした布地が巻かれており、下には水着を装着している様子だった。

「ラクト……」

「これで、この姿でする事は終わったな。」

ラクトはそう言うと、全身が徐々に白い光で包まれだした。

光が無くなると、そこには見覚えのある小さいラクトが立っていた。

「ふう。 これで、今回のお仕事は終わりですね。 スtrenジャーさん。」

「あ、ああ……」

笑顔で自分を見つめているラクトを見て、ストレンジャーは頷きつつ返事をした。

《ストレンジャー！ ラクト！》

2人が話していると、通信機からプレスルの声がした。

「プレスル。」

2人は声の主であるプレスルの声聞き、画像を切り替えた。

すると、白い粘着質のある液体に捕まったプレスルがいた。

そばには同じように捕まったグロウ、ブラベリー、テュードの姿があった。

《ゴメンね…… 失敗しちゃった。》

《俺とした事がな……》

《ちょっと動けねえからそっちが見えないんだが、チェリー様は？》

必死に抜け出そうとするプレスルは、チェリーの安否を問いかけた。

「ああ。 ラクトが追いかけて、チェリーを助けたぜ。 敵はもう消えた。」

一通りの騒動が終わった事を確認し終え、ストレンジャーは全員に報告をした。

《ラクトが？》

「はい。」

ストレンジャーの言った事を聞き、プレスルは少々驚きつつ言った。

「ちょっと力を使っちゃいましたけど、そのおかげで助けられました。」

ラクトはそう言いつつ、ミッションの成功に嬉しそうなそぶりを見せた。

《カ・・・シービショップのか・・・悪いな、使わせちゃって。》

「いいんです。あの時の恩義を、僕は返したかっただけなので。」

プレスルの言った事に対して、ラクトは笑顔で言った。

「今から俺らも、そっちに向かうよ。皆、そんな状態なんだろ？」

《エヘヘ・・・ゴメンね。》

《私とした事が、このような汚れた物に絡まれてしまいました。》

《ストレンジャー、早めに頼むぜ。さっきの騒動で、警備兵がこっちに来てるみたいだからな。》

「ああ、了解。」

皆の声を聞き、ストレンジャーはそう言った。

「ラクト、チェリーをもう一回運んでもらってもいいか？ 飛んで運ぶにも、今起きてないからさ。」

今後の事を考えたストレンジャーは、ラクトに提案を出した。

「わかりました。起きるまでココにいますので、ストレンジャーさんは先に行ってください。」

「ああ、わかった。」

ラクトにそう言われ、ストレンジャーは一足先にその場を後にした。

『皆さんのお役に、立ててよかったな。』

その場にチェリーと2人きりになったラクトは、空に浮かぶ満月を見つつ呟いた。
あの時の様な綺麗な満月が、自分の事を見守っている様だった。

『これからも、プレスルさん達と共に行動したいな。 あの時の珊瑚の元で誓った、言葉と共に。』

ラクトはそう思い、胸に刻んだ珊瑚の刺青を軽く指でなぞった。

— E P I S O D E E N D —